異世界探索紀？

ゆうさく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界探索紀？

【Ｎコード】
Ｎ５５９６Ｘ

【作者名】
ゆうさく

【あらすじ】
異世界に飛ばされた兄妹の物語

飛ばされた兄妹

ある日少年と少女は異世界へと飛ばされてしまった。
異世界へと飛ばされてしまった少年の名は陸、少女の名は恋。
陸と恋は兄妹である。
兄の陸が他の世界があるか調べるために妹に無理矢理協力させて空間を別の空間に繋げたその実験の失敗によって兄妹は全く知らない世界へと飛ばされてしまった。
「兄さんの実験のせいでここがどかも分からないのよ。」
「僕は自分達のいた世界以外へ来れたことに感動してるんだ。だから感動の邪魔はしないでほしい」「うるさい。これからどうするか考えなければならないのよ。このバカアニキ」「確かにこの世界から元の世界へと戻るための方法を探さなくってはならない。実験に使用した道具は失くなってしまった。」二人はこれからどう行動するのかを考えていた。
そんな時に一人の少女が二人の側にやってきた。
少女はレンと名のってこう聞いてきた。「なにか困った事でもおきましたか。」二人はレンに事情を説明した。
レンは二人にたいしてこの世界にある七ツの神器と呼ばれる道具を探したらどうかと言った。
その捜索に自分も手伝うと言ってくれたので兄妹はありがたいと思った。
七ツの神器を探すためにこの世界の地図を見せてもらった。
わかった事がこの世界が自分達のいた世界の倍の広さがある事だった。
二人はこれからどう行動するのかを考えていた。
そんな時に一人の少女が二人の側にやってきた。
少女はレンと名のってこう聞いてきた。「なにか困った事でもおきましたか。」二人はレンに事情を説明した。

レンは二人にたいしてこの世界にある七ツの神器と呼ばれる道具を探したらどうかと言った。
その捜索に自分も手伝うと言ってくれたので兄妹はありがたいと思った。
七ツの神器を探すためにこの世界の地図を見せてもらった。
わかった事がこの世界が自分達のいた世界の倍の広さがある事だった。
七ツの神器について分からない事が多かったが七ツの神器の形については知っていた。
七ツの神器は剣、弓盾、槍、鏡、鎧、勾玉だと言った。
七ツの神器のうち剣の名称は切り裂く風疾風と言った。１番近い場所に伝説が残っていると言うので兄妹は疾風を探すために近くの町で情報を集めた。
町の近くに魔の洞窟と呼ばれる場所があることを知った。　しかし武器がなければ魔物に襲われてしまうとわかったので兄妹は自分達にあった文庫を買う事にした。
その時レンがお金を出してくれたおかげでロングソードとコンバットボウを買う事ができた。
ロングソードは兄がコンバットボウは妹が使う事となったのである。
兄妹は魔物と対戦する事を考えて武器の使用方法を覚えたそして魔の洞窟に伝説の神器の一つである疾風を探しに入った。
「薄気味悪い洞窟ねこんな所に神器が有るのかしらね。」
「分からないからここにきたんだろ。」と兄妹が言い合っているのをレンは見ていた。
レンは魔物に気付き二人に言った。
「魔物スライムが来ました。」
戦闘はレンの火炎系魔法と陸の斬撃、恋の射撃によってすぐに終わった。奥に進み洞窟の最深部に到達した。
洞窟の最深部に切り裂く風疾風があったが魔物が持ち出す物に火

炎をはいてきた。
三人は魔物との戦闘に入った。
喋る暇もなく魔物との戦闘で手がいっぱいなのだ。
魔物にたいして兄は魔法が使えるかもしれないと思いロングソードに雷を纏わせると思い「雷よ我が剣に宿りて敵を討て」
その瞬間兄のロングソードに雷が宿り先程より魔物にダメージを与えた。
兄のその光景を見て妹も魔法を弓に纏わせた。
そしてレンは「風よ我ら三人に守りを与えよ。火と雷よ我が名により敵を討て。」
と風の防御と火と雷の複合魔法を魔物が倒れるまで使用した。
そして三人は魔物が倒れたのを確認して七ツの神器の一つ切り裂く風疾風を手に入れたのだった。

カエラズの塔

三人は次なる神器を求めてターレンと呼ばれる町にやってきた。ターレンと呼ばれる町には全てを撃ち抜く弓の伝説が残っていた全てを撃ち抜く弓は町はずれの森に建っている塔の最上階にあるらしい。
ただ今までいろんな冒険者が塔に挑んだがその冒険者達は帰って来る事はなかった。
それゆえにその塔はカエラズの塔と呼ばれる。
しかし兄妹はその塔に伝説の神器の一つが有るかもしれないため装備を整えて塔に挑む事にした。　塔の階層は8階まであるだろうとレンは言っていた。　レンの指示に従い石を投げて罠の確認をしてみた。
その結果即死系の罠が大量に仕掛けられていた。
「レンの指示がなかったらやばかったぜ。」
「兄さんにしては珍しい事を言っているわね。
私も兄さんの意見には不本意だけど賛成ね。」
と言っている時に偶然モンスターとであってしまった。
そのモンスターはコブリンと呼ばれるモンスターだったが三人にとっては伝説の神器の一つである切り裂く風疾風でコブリン達をあっさりと片付けた。
2階層目では罠は少なかったがモンスターが大量に居て苦労した。
三階層目ではコブリンの中でも強いメイジコブリンがいた。　メイジコブリンの魔法をレンが魔法で防御して兄妹が剣と弓で倒した。
そのあと四階層から七階層まではわりと即死系の罠や強力なモンスターはいなかったが普通にスライムやコブリンなどのモンスターには襲われたがモンスターはあっさりと倒され続けた。
問題の第八階層だった八階層には罠だらけだった。
罠は落とし穴や貫きの床、飛翔する槍、魔炎、魔雷と魔法について知らないと死んでしまう罠まであった。罠をやり過ごし宝物庫へ三

人は入った。　宝物庫ではケルベロスと呼ばれる巨大なモンスターがいた。
ケルベロスには切り裂く風疾風で切ってもすぐに回復してしまった。
「くそ攻撃がきかねい。」
「私の攻撃もきかないわ。」
と兄妹は言いながらも攻撃を続けた。
レンがこう言った。「私の魔法が完成するまで頑張って下さい。」
「「わかった」」
と兄妹は答えた。
「火よ水よ風よ雷よ我が意思に従い一つの固まりとなりて我が前にある敵を貫け四神の槍」
使える人は少ない最強ではないが高位の魔法、四槍がケルベロスを一瞬で灰にした。
「「「ふうやっと終わった」」」
と三人は言った。
宝物庫を調べて一つの弓が見つかった。弓は闇を撃ち抜く光閃光だった。
二つ目の神器を手に入れた三人は新たな神器の情報を求めて次なる町へと向かったのだった。

闇の武器

次なる神器を求めてやってきたのは王都エルアリアだった。この世界に来て初めて王都に来た兄妹は自分達の世界にいた時にはなかった物に目を輝かせていた。そんな兄妹にレンははしゃぎ過ぎないようにと注意したのだった。

兄妹はレンの忠告は正しいとわかっていたのでレンの忠告に従いエルアリアで神器について調べる事にしたのだった。　調べてすぐに神器に関する情報が見つかったがその情報は神器と対となる闇の武具について書かれた本だった。

それによれば闇の武具も神器と同じように七ツあるらしい。その一つがこの近くのダンジョンにあるかもしれないしかも闇の武具は神器と違い人を選びその人の意識を乗っ取る危険なシロモノだったのである。

しかも選ばれた人以外が手にするとその人に向けて能力が発動し死に致らしめる物だった。そのダンジョンに入って闇の武具を封印してから次の神器の情報を調べる事に使用と三人は決めたのだった。

そして夜になりダンジョンを攻略して闇の武具を封印するために今日はみんな寝る事にしたのだった。そしてダンジョン攻略の準備が完了して三人はダンジョンへと入って行った。

三人は神器を二つもっていたためにモンスターに襲われる事もなくダンジョンの最心部にきたのだったが時遅く闇の武具の一つ漆黒の風に意識を乗っ取られた哀れな冒険者がいた。　意識を完全に漆黒の風に乗っ取られた冒険者は殺すしかないと書かれていたため三人は自分達の最強技を叩き込み。

漆黒の風を封印したのだった。

封印した後エルアリアに戻りレンが王様に連絡したら王様から直接王様から王宮に来るように呼ばれた兄妹は王宮に来て王様からこう言われた。

「闇の武具の一つを封印してくださいましてありがとうございます。何かお困りでしたら力になります。」
「「え、よろしいのでしょうか？」」
と兄妹が言ったら王様はこう話した。
「私達は闇の武具について情報があったのたが闇の武具の封印ができる者がいなくって困っていたところだったのですよ。それに闇の武具をほっといておくと町が滅んでしまうので封印できる者を捜していたのですよ。」と王様に言われたので王様に七ツの神器についての情報を教えてもらえないか三人は聞いて見たところ王様はこう言った。
「七ツの神器の場所を示す地図が我が王家に伝わっているのでそれをそなた達に渡そう。
他に必要な物はないか？」
と三人は聞かれたので三人は神器に関する地図だけもらえればいいと答えたのだった。
それから王様に地図を渡して貰い地図をみたら自分達の居場所に二つの点がひかっていたため三人は最高の情報を手にいれたのであった。
そして次なる神器の場所へ向かい歩いて行ったのであった。

魔法反射？

エルアリアを出て次なる神器のある場所の近くにある神聖都市ガイアにやってきた三人だったのだ。　ガイアでは冒険に出る者にとって重要な役割を果たしているギルドと呼ばれる場所があり冒険者になる者は必ずギルドに加入しなければならないのである。

そこで三人は職業を決めたのだった。　陸は戦士、恋はレンジャー、レンは賢者で登録して伝説の盾がある魔物の洞窟と呼ばれる洞窟に向かっていったのだ。　魔物達は火炎の息や雷撃の息、氷雪の息などの魔法を使って来たのでレンは、二人に魔法反射の呪文を唱える間だけ防御に専念するように言われたので二人は言われたとおりにした。

そしてレンは、呪文をこのように唱えた。

「全ての特性を跳ね返す盾よ具現せよ。」

そして魔物達は自分達の魔法で全滅し三人は盾の神器を手に入れたのだった。　盾の神器だけは誰にも名称が分からなかった。

名称が分かるようになるのは盾の神器だけは必要になるまで名称がわからないままになっているように魔法が掛けられているそうなのでまだもっているだけにしようとなったのだ　そして次なる町に三人は向かって行ったのだ。

まさかの？

三人は次なる町サバクの城と呼ばれる町にやってきたのだが厄介な問題が発生したのだ。

その厄介な問題とは女性または女性の恰好をしている者以外入国はもちろんのこと町を通過することもできないと言われたのでレンと恋は二人がかりで陸に女装させようと奮闘しているのだった。

「お兄ちゃん、この服着てよ。絶対似合うよ？」

「絶対似合うよ？じゃねいよ。絶対に着ないからな。」

「陸さん着て下さいよ。この町を通過出来ないじゃないですか。お願いします。」

「着たくない物は着たくないんだ。」　「チィ」

「今チィて言わなかったか？」

「き、気のせいですよ。でも着てもらわないと困りますわね。」と言い合っているうちに恋が兄の後ろに立ち一撃で気絶させ無理矢理女性の服を着させた。

陸が気付いた時には女装させられたことに気付きものすごく落ち込んだようだった。

しかもレンと恋は、すごく綺麗です。とか兄さん女装すると男に見えないとか言われてさらに落ち込んでしまったのだった。

後で自分で鏡を見てつぼになりそうになって落ち込みかけたことは妹に絶対に言えないと陸は思ったのだった。

そして三人はなんとか町に入ることができ一週間町で新たな情報を探すこととなったのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5596x/

異世界探索紀？

2011年11月5日03時02分発行